

300年の名器による珠玉の室内楽



上野通明
Michiaki Ueno
ストラディヴァリウス1730年製
チェロ「フオイアマン」

ティモシー・チュウイ
Timothy Chooi
ストラディヴァリウス1709年製
ヴァイオリン「エンゲルマン」

須関裕子
Hiroko Suseki
ピアノ

Encounter with
Stradivari

ストラディヴァリウス・コンサート 2025

PROGRAM

ベートーヴェン：チェロ・ソナタ 第3番 イ長調 作品69

Beethoven: Cello Sonata No.3 in A major, Op.69

- I. Allegro ma non tanto
- II. Scherzo. Allegro molto
- III. Adagio cantabile - Allegro vivace

上野 通明 (チェロ)
須関 裕子 (ピアノ)

Michiaki Ueno (cello)
Hiroko Suseki (piano)

グリーグ：ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ハ短調 作品45

Grieg: Violin Sonata No.3 in C minor, Op.45

- I. Allegro molto ed appassionato
- II. Allegretto espressivo alla Romanza
- III. Allegro animato

ティモシー・チューイ (ヴァイオリン)
須関 裕子 (ピアノ)

Timothy Chooi (violin)
Hiroko Suseki (piano)

～ 休憩 Intermission ～

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第2番 ハ短調 作品66

Mendelssohn: Piano Trio No.2 in C minor, Op.66

- I. Allegro energico e con fuoco
- II. Andante espressivo
- III. Scherzo: Molto allegro quasi presto
- IV. Finale: Allegro appassionato

ティモシー・チューイ (ヴァイオリン)
上野 通明 (チェロ)
須関 裕子 (ピアノ)

Timothy Chooi (violin)
Michiaki Ueno (cello)
Hiroko Suseki (piano)

チケット販売による収入は、公益財団法人ひょうご子どもと家庭福祉財団 (9/13神戸公演)、一般財団法人山形市都市振興公社 (9/15山形公演)、公益財団法人サントリー芸術財団サントリーホール (9/18東京公演) の行う公益事業に使われます。

All proceeds from ticket sales will each be used for public interest projects conducted by the Foundation for Children & Family Service of Hyogo Japan (9/13 Kobe concert), the Yamagata City Promotional Foundation (9/15 Yamagata concert) and the Suntory Foundation for the Arts (9/18 Tokyo concert).

曲目解説

ベートーヴェン：チェロ・ソナタ 第3番 イ長調 作品69

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770～1827）より前の時代、チェロは低音で音楽を支える役割を担い、あまり独奏楽器とは見なされていませんでした。そのためチェロとピアノのためのソナタとしては、じつはベートーヴェンが「創始者」と言える存在なのです。ハイドンやモーツァルトといった先輩作曲家の傑作が立ちはだかるジャンルとは異なり、チェロ・ソナタではベートーヴェンは自由にさまざまな実験をしながら、表現の可能性を開拓していきました。

《チェロ・ソナタ第3番》が完成したのは1808年、《交響曲第5番「運命」》や《同第6番「田園」》などの名曲と同年のこと。第1楽章は静かにチェロのみによって奏される主題で始まり、続く楽想はこのなかの動機から展開されてゆきます。第2楽章はスケルツォで、絶え間ないシンコペーションが独特なリズム感を生み出します。そして緩徐楽章とも、終楽章への序奏ともとれる短いアダージョ部分を経て、叙情的なロンド・フィナーレで締めくくられます。

グリーグ：ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ハ短調 作品45

エドヴァルド・グリーグ（1843～1907）はノルウェーを代表する作曲家です。彼はライプツィヒに留学し、ドイツ音楽の伝統を学んだ後、そうした要素とノルウェーの民俗音楽の要素とを融合させた作品を書きました。1886～87年に作曲されたこの曲でも、民俗的な素材が用いられています。初演は1887年12月10日、ライプツィヒにて。ヴァイオリンはアドルフ・プロツキーというチャイコフスキーの《ヴァイオリン協奏曲》も初演した人物、ピアノは作曲者が演奏し、たちまち大人気となりました。

第1楽章は上行と下行を繰り返す印象的な主題で始まります。長調と短調の頻繁な交替など、ノルウェーの民俗音楽の特徴が活かされています。緩徐楽章の第2楽章には、保続低音を伴った民俗舞曲を思わせる中間部がはさまれます。第3楽章では2つの楽器の対話がより緊密になり、最後はプレスティッシモにテンポ・アップし、冒頭にハ短調で奏された主題が、ハ長調の輝かしい主題となって閉じられます。

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第2番 ハ短調 作品66

フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ（1809～1847）は《ピアノ三重奏曲 第2番》を1845年に作曲し、友人の作曲家でヴァイオリニスト、ルイ・シュポーアに献呈しました。ピアノと2つの弦楽器がバランスよく書かれていますが、とりわけピアノ・パートが難解なことで知られています。

メンデルスゾーンの世代の作曲家にとって、「ハ短調」は特別な響きがありました。というのもモーツァルトやベートーヴェンがこの調で印象深い作品を書き残したからで、この作品にはベートーヴェンの《序曲「コリオラン」》に通じるような雰囲気があります。重々しく情熱的な第1楽章で始まり、ゆったりとした舟歌のような第2楽章へと続きます。第3楽章はスケルツォ。《夏の夜の夢》でも聴かれるメンデルスゾーン特有の妖精のような軽やかさがあります。そして第4楽章はバロック時代の舞曲やコラル（ルター派の讃美歌）を思わせる主題で、華やかなクライマックスへと向かいます。

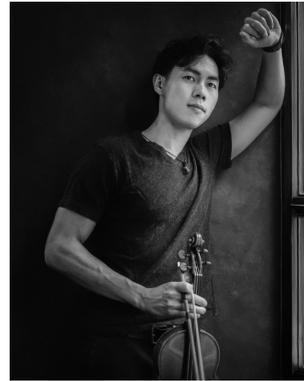
解説：越懸澤 麻衣（音楽学）

ティモシー・チューイ

ストラディヴァリウス1709年製ヴァイオリン「エングルマン」

カナダ生まれのティモシー・チューイは同世代で最も魅力的なヴァイオリニストの一人であり、ステージ上での圧倒的な存在感と深く表現力豊かな芸術性で高い評価を得ている。

エリザベート王妃国際音楽コンクール、ヨーゼフ・ヨアヒム国際ヴァイオリンコンクール入賞。ソリストとしてベルリン・ドイツ交響楽団、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団、ベルギー国立管弦楽団、東京交響楽団等の主要オーケストラとの共演、また、アムステルダム・コンセルトヘボウ、ウィーン楽友協会、カーネギーホール等の著名なホールにも出演している。海外での放送やメティチTVに定期的に出演している他、アンネ＝ゾフィー・ムターとドイツ・グラモフォンでレコーディングを行っている。2025/26シーズンにはNHK交響楽団や、フィルハーモニー・ド・パリでのプラハ放送交響楽団とのデビューを控えている。オタワ大学で弦楽器部主任兼ヴァイオリン准教授を務める。



©Dennis Sweeney

Timothy Chooi

Stradivarius 1709 Violin “Engleman”

Born in Canada, Timothy Chooi is one of the most compelling violinists of his generation, praised for his commanding stage presence and deeply expressive artistry. He is a laureate of both the Queen Elisabeth and Joseph Joachim International Violin Competitions. He has performed as soloist with leading orchestras such as the Deutsches Symphonie-Orchester Berlin, Royal Philharmonic Orchestra, Belgian National Orchestra and Tokyo Symphony Orchestra, and appeared at iconic venues including the Concertgebouw Amsterdam, Musikverein Wien, and Carnegie Hall.

A frequent guest on international broadcasts and Medici TV, Chooi has also recorded with Anne-Sophie Mutter for Deutsche Grammophon. In the 2025–26 season, he debuts with the NHK Symphony Orchestra and the Prague Radio Symphony at the Philharmonie de Paris.

He is Associate Professor and Head of Strings at the University of Ottawa.

ストラディヴァリウス1709年製ヴァイオリン「エングルマン」について

About the Stradivarius 1709 Violin “Engleman”

ティモシー・チューイ Timothy Chooi

エングルマンは、私がこれまで出会った中で最も底知れない暗さと深い音色を持つヴァイオリンの一つです。瞬時に鮮明かつ精緻な音色を奏でながら複雑さと深さに満ちており、まるで一つ一つの音色に物語があるかのようです。G線の低音から上昇する高音まで、全音域を通して色彩と味わいを放つこの楽器の力に常に驚かされます。

最近になって、エングルマンの独特な個性を理解し始めました。そのあまりの強烈さに、演奏を中断して別のヴァイオリンを弾き、そして新鮮な耳で再びこの楽器に戻ることが必要になるときもあります。このプロセスにより、このヴァイオリンが持つ音色の独自性を真に理解できるようになります。単なる力強さと龍のような存在感に留まらない、雷鳴のような響きから囁くようなニュアンスまで、表現の全領域を駆使する方法を学ぶことに尽きます。

この楽器を弾く度に、今でも「ワツ」と驚かせてくれる瞬間があります。それは私を突き動かし、私に挑み、インスピレーションを与え続けてくれます。楽器が何をもたらしてくれるのか、私はまだ見つけ始めたばかりだと感じています。

The Engleman is one of the most profoundly dark and deep-sounding violins I've ever encountered. Its tone is at once crisp and precise, yet rich with complexity and depth—like each note carries its own story. What continues to astonish me is the instrument's ability to project color and flavor across its entire range—from the low G string to the soaring upper registers.

More recently, I've begun to understand that the Engleman has a personality all of its own. At times, its intensity requires me to take a break, play another violin, and then return with fresh ears. This process helps me truly appreciate the uniqueness of its voice. It's no longer just about its power and dragon-like presence - it's about learning how to harness its full spectrum of expression, from thunderous resonance to whispering nuance.

Each time I play it, there's still that 'wow' moment. It continues to push me, challenge me, and inspire me — and I feel like I'm only just beginning to uncover what it has to offer.

上野 通明

ストラディヴァリウス1730年製チェロ 「フォイアマン」

2021年ジュネーブ国際音楽コンクール・チェロ部門で日本人初の優勝、併せて3つの特別賞を受賞し、その非凡で圧巻の演奏で一躍話題となる。

第6回ルーマニア国際音楽コンクール最年少第1位、第21回ヨハネス・ブラームス国際コンクール第1位など国際舞台で次々と活躍。ソリストとしてワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団、スイス・ロマンダ管弦楽団、

KBS交響楽団、NHK交響楽団、読売日本交響楽団、国内外のオーケストラと多数共演。青山音楽賞新人賞、出光音楽賞、ホテルオークラ音楽賞、齊藤秀雄メモリアル基金賞、日本製鉄音楽賞受賞他、文化庁長官国際芸術部門表彰。

現在デュッセルドルフを拠点に、主にヨーロッパと日本で活発な演奏活動を行なっている。住野泰士コレクションからF.トルテの弓を貸与されている。



©Seiji Okumiya

Michiaki Ueno

Stradivarius 1730 Cello “Feuermann”

First ever Japanese winner and recipient of three special prizes at the Geneva International Music Competition 2021, Michiaki Ueno's exceptional and spectacular performance has garnered worldwide attention.

He is the winner of the 6th Romanian International Music Competition and the International Johannes Brahms Competition. As a soloist, he has performed with orchestras nationally and internationally including the Warsaw Philharmonic Orchestra, Orchestre de la Suisse Romande, KBS Symphony Orchestra, NHK Symphony Orchestra and the Yomiuri Nippon Symphony Orchestra.

He is a recipient of the Aoyama Music Award New Artist Award, Idemitsu Music Award, Hotel Okura Music Award, Saito Hideo Memorial Fund Award, Nippon Steel Music Award, and the Agency for Cultural Affairs Commissioner's International Arts Award.

He is based in Düsseldorf and is active mainly in Europe and Japan.

He plays on a bow by F. Tourte (Taishi Sumino collection).

ストラディヴァリウス1730年製チェロ「フォイアマン」について

About the Stradivarius 1730 Cello “Feuermann”

上野 通明 Michiaki Ueno

日本音楽財団よりストラディヴァリウス「フォイアマン」をお借りしてから、数ヶ月が経ちました。その音の存在感、そしてこちらに語りかけてくるような鋭さに、日々新たな刺激を受けています。理想とする音やセッティングを試行錯誤しながら探り、音にいつその張りや硬質な輪郭が生まれ、力強く艶やかな響きが得られるようになりました。芯のある強音から繊細な弱音まで、ホール全体にクリアに届くのは、この楽器ならではの魅力だと感じています。

また、この楽器には、これまで多くの優れた演奏家たちの手を経てきた歴史が刻まれており、その重みと責任を日々実感しています。その一端を担えることは大変光栄であり、身の引き締まる思いです。演奏するたびに新たな気づきを得て、多くの刺激をもらうこの「フォイアマン」と向き合い続けるなかで、一音一音により多彩な色を持たせ、楽器の音の魅力を最大限にお伝えしていければと思います。

It has been a few months since receiving the loan of the Stradivarius “Feuermann” from the Nippon Music Foundation. I have been inspired daily by the presence of the sound and its intensity, as if it were speaking to me. Through trial and error searching for the ideal sound and set-up, I have been able to gain a stronger and clearer outline in the sound, resulting in a more powerful and lustrous resonance. I feel that the unique appeal of this instrument is that it can reach entire halls with such clarity, from a strong sound with a core to a delicate, soft sound.

Moreover, this instrument is engraved with the history of being passed down through the hands of many distinguished musicians, and I feel the weight and responsibility of that every day. It is a great honor to be a part of that, as well as a sobering experience. As I continue to work with the “Feuermann”, gaining new discoveries and inspirations every time I play, I hope to bring diverse colors to each and every note and convey the beauty of the instrument's sound to the fullest.

須関 裕子 (ピアノ)

桐朋学園大学音楽学部卒業、同大学研究科を首席修了。
これまでにピアノを寺西昭子、ミハイル・ヴォスクレセンスキーの各氏に師事。野平一郎プロデューサー「ピアノ伴奏法講座」修了。

第2回チェルニー＝ステファンスカ国際ピアノコンクール第1位。第18回園田高弘賞ピアノコンクール第3位。第16回宝塚ベガ音楽コンクール第1位。第3回国際室内楽アカデミー（ドイツ）にてグランプリを受賞。第1回ベヒシュタイン室内楽コンクール第2位。

ソリストとして多くのオーケストラと共演の他、シヨパンの生家等ポーランド各地でリサイタルを行う。アンサンブル奏者として、堤剛をはじめ国内外の多くの演奏家の信望も厚く、リサイタルやCD等で共演している。2018年にデビューCD「La Campanella」をリリース。NHK-BS「クラシック倶楽部」、NHK-FM等に出演。

桐朋女子高等学校および桐朋学園大学非常勤講師(ナンバリズミック)。桐朋学園大学音楽学部管楽器・打楽器・ハープ部会嘱託演奏員（ピアノ伴奏）。



©Sho Yamada

Hiroko Suseki, piano

Hiroko Suseki studied with Akiko Teranishi and Mikhail Voskresensky. She graduated from the Toho Gakuen School of Music master's program with top honors and completed the "Piano Accompaniment Course" by Ichiro Nodaira.

She is a winner of the 2nd Czerny-Stefańska International Piano Competition, the 16th Takarazuka Vega Music Competition, Grand prize at the 3rd International Chamber Music Academy in Germany and 2nd prize at the 1st Bechstein Chamber Music Competition. Solo highlights include performances with numerous orchestras as well as recitals in various cities in Poland including Chopin's birthplace. As a Chamber Musician, she has gained high regard from musicians nationally and internationally including cellist Tsuyoshi Tsutsumi, through collaborations in recitals and CDs.

She has also made appearances on NHK-BS "Classic club and NHK-FM radio". In 2018, she released her debut solo album, "La Campanella".

She is an official accompanist and lecturer at the Toho Gakuen School of Music.

日本音楽財団 NIPPON MUSIC FOUNDATION

日本音楽財団は、1974年に日本国内の音楽文化の振興と普及を目的として設立され、創立20年を迎えた1994年からは、西洋クラシック音楽を通じた国際貢献を目的として弦楽器名器の貸与事業を行っています。

保有する世界最高クラスの弦楽器21挺（ストラディヴァリウス製ヴァイオリン15挺、チェロ3挺、ヴィオラ1挺、グアルネリ・テル・ジェズ製ヴァイオリン2挺）を若手有望演奏家や世界で活躍する演奏家に国籍を問わず無償で貸与し、同時に、これら世界の文化遺産ともいわれる名器を次世代に継承するための保守・保全を行っています。また、楽器をお貸ししている演奏家によるコンサートを日本国内外で開催し、名器の音色に触れる機会を提供しています。

日本音楽財団の事業は、日本財団の全面的な支援により実施されています。

Nippon Music Foundation was established in 1974 with the objective to enhance music culture in Japan. In 1994, the Foundation started the "Instrument Loan Project" through which the Foundation has strived to make international contributions by loaning the top-quality string instruments acquired by the Foundation.

The Foundation now owns 21 string instruments (15 Stradivarius violins, 1 viola, 3 cellos and 2 Guarneri del Gesù violins), and as the custodian of these world cultural assets, maintains them for future generations and loans them gratis to young promising musicians and internationally active musicians regardless of their nationalities.

The Foundation's activities are made possible by the generous support of The Nippon Foundation.



Website
<https://www.nmf.or.jp>

■ 神戸文化ホール開館50周年記念事業

1973年開館の神戸文化ホール。2023年より、開館50周年を記念して、神戸文化ホールがプロデュースする「開館50周年シリーズ」を開催しています。神戸で創る舞台芸術を「港町」「劇場」「人間」という3つの「讃歌」をテーマに、3年間のシリーズプログラムをお届けしています。

■ 神戸国際フルートコンクール

1985年より4年ごとに開催される「神戸国際フルートコンクール」は、世界三大フルートコンクールのひとつにも数えられる、フルートに特化した世界でも稀なコンクールです。世界の第一線で活躍するフルート奏者を数多く輩出していることから、世界的に高い評価を得ており、若手フルーティストの憧れの舞台となっています。今年（2025年8月29日～9月7日）開催の第11回大会は、世界41の国と地域から357名の応募があり、予備審査を経て選ばれた40名が神戸に集い、その若き才能を競い合いました。



第9回神戸国際フルートコンクール・本選より

■ 関連事業「KOBE国際音楽祭2025」

「第11回神戸国際フルートコンクール」を核とした音楽祭を2025年夏に初開催。世界的アーティストや神戸出身または在住の音楽家を迎えるコンサート等、国際色豊かで質の高い文化芸術を神戸から発信するとともに、学校や医療・福祉施設等へのアウトリーチプログラムも実施することで、年齢や障害の有無、経済的状況に関わらず、文化芸術に触れられる音楽祭を目指します。

■ 神戸市室内管弦楽団

1981年、神戸市が実力派の弦楽器奏者たちを集めて室内合奏団として設立、2018年、管楽器群を加えて室内管弦楽団となる。音楽監督の鈴木秀美とともに、定期演奏会の他、地域へのクラシック音楽普及など、公共の楽団としての活動も精力的に行っている。

- ◆音楽監督：鈴木秀美
- ◆首席コンサートマスター：高木和弘
- ◆コンサートマスター：西尾恵子、森岡聡

■ 神戸市混声合唱団

1989年に神戸市が設立した、日本では数少ないプロフェッショナル合唱団。密度が高く澄みきった美しいハーモニーは高い評価を得ている。神戸文化ホールの専属団体として、音楽監督の佐藤正浩とともにさらなる飛躍に努め、文化振興や社会公益活動にも注力している。

- ◆音楽監督：佐藤正浩
- ◆副指揮者：青木耕平、森脇涼
- ◆コンサートマスター：三河紀子（ソプラノ）

公益財団法人 神戸市民文化振興財団（神戸文化ホール指定管理者）

設立 昭和57年10月1日
所在地 〒650-0017 神戸市中央区楠町4丁目2-2 神戸文化ホール内



■ 当財団について

ひょうご子どもと家庭福祉財団は、障がいのある子どもたちへの支援を行っている民間の福祉団体です。1968年の創立以来、特別な配慮を必要とする子どもたちとご家族みなさんの幸せを願い、療育訓練やレクリエーション活動をはじめとした、様々な活動を展開しています。

＜沿革＞

- 1968年 「心身障害児福祉ビューロー」として発足（1978年に財団法人としての認可を受ける）
西宮市内に事務所を開き、在宅児訪問や日曜託児などをはじめ
- 1973年 父母の会の希望を受け、神戸市内にも事務所を開設（現：法人本部）
- 1975年 訓練士による専門的な療育訓練をはじめ
- 1997年 子ども発達支援センター・さんだ 開設
- 1998年 三田市が「かるがも園」を開設し、運営を受託
- 2000年 神戸市療育センターにて、療育訓練の協力をはじめ
- 2008年 兵庫県社会賞 受賞
- 2011年 公益財団法人としての認可を受ける
- 2018年 「公益財団法人ひょうご子どもと家庭福祉財団 50周年記念 感謝の集い」を開催



感覚統合療法

【療育事業】

子どもたちが主体的に周囲の人や物と関わり、もって生まれた能力を伸ばすための支援をしています。主に、神戸市と三田市に開設した「子ども発達支援センター」にて、言語聴覚士・作業療法士・理学療法士による専門的な個別訓練や発達相談を行っています。また、三田市より委託を受け、障がいのある未就学児の通園施設「かるがも園」を運営し、子どもたちの総合的な療育活動にも取り組んでいます。



自然体験クラブ

【激励支援事業】

子どもたちが様々な経験を積み、身体を動かす楽しさや人との関わりに心地よさを感じることができるよう、「トランポリン教室」や「少林寺拳法教室」などのプログラムを実施しています。また、お友だちと協力しながら色々な活動に取り組む「サマースクール」や、農業体験・川遊びを楽しむ「自然体験クラブ」などのファミリーレクリエーションをはじめ、ご家族みなさんが安心して楽しめる活動も提供しています。



【啓発事業】

障がいへの理解を深めていただくための啓発文書の発行や、チャリティーボックスの設置などを行い、子どもたちが地域社会の中で守り育てられるよう、地域のみなさまに呼びかけています。

チャリティー・ボックス

公益財団法人ひょうご子どもと家庭福祉財団

〒650-0004 兵庫県神戸市中央区中山手通5-1-1
TEL 078-382-0294/FAX 078-371-0966/ホームページ <https://kodomo-katei.org>

■ ホールについて

国内有数の音響を誇る「テルサホール」は、クラシック演奏会やコーラスの発表会に適したコンサートホールです。ピアノソロから最大三管編成（約75名程度の演奏者）によるオーケストラ演奏まで対応できる舞台（約160㎡）を有し、その他にもホールオペラや講演会にも使用できます。2021年に開館20周年を迎えました。



■ ホール概要

設計：現代建築研究所・伊藤喜三郎建築研究所・本間利雄設計事務所共同企業体

劇場計画：シアターワークショップ

客席数：806席（1階556席、2階250席）

残響時間：空席1.9秒、満席1.7秒（音響設計＝永田音響設計）

■ 所蔵楽器

グランドピアノ：スタインウェイ 2台

ヤマハ 2台

カワイ 1台

■ 主催事業

開館以来、国内外の一流アーティストを迎えて、ジャンルを超えた選りすぐりのコンサートを主催しています。数々のトップアーティストをも魅了するテルサホールの響きは観客に感動のひとときを届けてきました。

また、次世代を担う子供たちに音楽芸術文化に触れてもらう「青少年育成事業」や普段クラシックや音楽に触れる機会の少ない方が気軽に楽しめる「普及事業」にも力を入れており、これまで多くの学生たちが参加しています。



2001.5.22 山形テルサオープニングコンサート～ピアノの女王、アリシア・テラローチャと山形交響楽団（指揮：黒岩英臣）の共演～



2015.10.29 全国共同制作プロジェクト モーツァルト 歌劇 フィガロの結婚～庭師は見た！～新演出



2024.12.28 山形テルサの第九
14年連続開催となった年末恒例の第九。



2024.9.6 山響&山形テルサが贈る おんがくの森with マエストロ〈第28楽章〉山形交響楽団のリハーサル見学とマエストロへの質問コーナーが人気の青少年育成事業。

山形テルサ指定管理者一般財団法人山形市都市振興公社

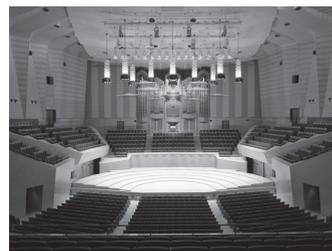
〒990-0828 山形県山形市双葉町1丁目2番3号

TEL 023-646-6677 / ホームページ yamagataterrsa.or.jp

山形テルサWEBチケット p-ticket.jp/yamagataterrsa



サントリーホールは、“世界一美しい響き”をコンセプトに東京初のコンサート専用ホールとして1986年に開館。近年では年間約600公演を開催し、約60万人をお迎えしています。開館当初よりオリジナル企画の主催公演を開催、世界的なアーティストや作曲家、コンサートホールと協働し、グローバルな視野で活動を展開してきました。1987年から続く現代音楽の祭典「サマーフェスティバル」、開館25周年の2011年からスタートした初夏の室内楽の祭典「チェンバーミュージック・ガーデン」は、国内外で注目を集めています。毎年秋にはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団を招聘し、未来の聴衆や音楽家を育む特別プログラムとともに、「ウィーン・フィルハーモニー ウィーク イン ジャパン」を開催しています。また、「Enjoy! Musicプログラム」と題した教育普及・社会貢献活動を展開し、未来を担うこどもたちに向けたプログラムや、プロフェッショナルを目指す若手音楽家を対象とした「サントリーホール アカデミー」、すべての人に身近なホールとなるための多彩な取り組みを実施しています。



大ホール

客席数2,006席。20世紀を代表する世界的指揮者、ヘルベルト・フォン・カラヤンのアドバイスにより、日本で初めて客席がステージを取り囲むヴィンヤード形式を採用。連日、国内外のアーティストたちが名演を繰り広げています。正面には、世界最大級のオルガン（パイプ数：5,898本／74ストップ、オーストリアのリーガー社製）を備えます。



ブルーローズ（小ホール）

可動式の客席（最大432席）により、自由に新しい音楽空間を演出できる小ホール。室内楽やリサイタル、講演会など幅広くご利用いただけます。2007年の改修により、新たな挑戦の舞台として活用していただきたいという思いから、「ブルーローズ」と名づけられました。不可能の代名詞といわれる青いバラをサントリーがバイオ技術で開発したことにちなんでいます。

公益財団法人サントリー芸術財団 サントリーホール

〒107-8403 東京都港区赤坂1-13-1

TEL 03-3505-1001 / ホームページ suntory.jp/HALL/

サントリーホールチケットセンター TEL 0570-55-0017（10：00～18：00、休館日をのぞく）

神戸

9.13 土 15時開演

神戸文化ホール 中ホール

主催：日本音楽財団、神戸市民文化振興財団
共催：ひょうご子どもと家庭福祉財団 助成：日本財団
協力：子ども発達支援センターコンサート実行委員会

山形

9.15 月祝 15時開演

山形テルサ テルサホール

主催：日本音楽財団
山形テルサ指定管理者(一財)山形市都市振興公社
助成：日本財団

東京

9.18 木 19時開演

サントリーホール ブルーローズ

主催：日本音楽財団、サントリーホール
助成：日本財団

Encounter with
Stradivari
2025